

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

吉弘氏は大友氏庶流の一族で、田原氏分家の血縁です。元は吉弘城を拠点に武蔵地域(国東市)に領土を持ち、16世紀前半に都甲地域(豊後高田市)に移動して屋山城を居城にしたとされます。

歴代当主の中で最も活躍が目覚ましかったのは、吉弘鑑理です。当初は鑑直と称した智勇兼備の武將で、主君大友義鎮(宗麟)の信任が厚く、政権中枢の加判衆に抜かれます。また、鑑理の娘の菊姫は、義鎮の嫡男義統に嫁いで正室となり、主家との縁戚でも抜きでた存在でした。

弘治元(1555)年、東シナ海沿岸で暗躍する倭寇の取り締まりに窮した中国の明王朝は、日本に鄭舜功を派遣します。鄭舜功は、福建から琉球を経て日本に渡り、九州東岸を北上して豊後に上陸します。倭寇禁圧を要請する使者2人を京都の幕府に派遣し、自らは倭寇の巢窟九州での最大の公権力と見なす大友義鎮と交渉したのです。

この時の交渉の詳細は、鄭舜功が中国に戻って編さんした「日本一鑑」という史料に記されています。それによると、鄭舜功が豊後で面会した相手は、当主の「修理大夫源義鎮」(大友義鎮)だけではありません。「国臣」(豊後国の重臣)と肩書された臼杵鑑統・田北鑑生・吉岡長増・雄城治景・志賀親守・臼杵鑑速、そして吉弘鑑直

吉弘鑑理 大友家支えた加判衆の一人



毎年7月に行われる吉弘衆(国東市武蔵町)

鑑理)の加判衆7人とも、倭寇取り締まりを巡って対面したことが分かります。鄭舜功は、鑑理は、その後も吉岡長増や臼杵鑑速らとともに主君義鎮を

支えます。そして、鑑理の跡は、嫡男の鎮信(1544～78年)、孫の統幸(1563～1600年)が継承します。一方、鑑理の次男鎮理は、永禄9(1566)年に毛利氏方に寝返って家督を剝奪された高橋鑑種に代わって同家の養子となり、「高橋鎮種」を名乗り、後に入道して「高橋紹運」を号します。その紹運の子統虎も、戸次家の養子となって「戸次統虎」を名乗り、江戸時代には筑後柳川藩初代藩主立花宗茂になります。

戦国時代に大友家を支えた吉弘氏は、このように高橋家や戸次家、立花家へと、その血脈を継承していったのです。

なお、国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産に登録された「風流踊」の一つ、楽庭八幡社(国東市)の「吉弘衆」は、14世紀に吉弘氏が始めた五穀豊穡・戦勝祈願の「衆打ち」太鼓踊が起源とされます。(名古屋学院大学国際文化学部教授)

11月1回掲載